

ずいそう



「朱鷺の島」佐渡での生活

昆 正 広



私が初めて佐渡に渡ったのは高校生の時、部活の仲間と二ツ亀キャンプ場に遊びに行ったのが始まりでした。当時は埃が舞う凸凹道路が多かった様に記憶しています。

2度目は昭和51年夏、現在の妻と車で旅行に行きました。雄大な自然に魅了され、特に海の透明度には驚かされました。反面、観光地の建物は古く設備はお粗末なもので特にトイレが水洗では無くガツカリの旅でした。

それが何という事でしょう！昭和53年、まさかの転勤で佐渡での生活。これが一大転機となりました。

住んでみて驚くことばかりでした。当然コンビニは無く、商店街は19時で終了。街灯は無く夜は真っ暗な世界です。冬は、水道管が凍りヤカンで沸かした熱湯で溶かすのが日課でした。

そんな中、5年出来なかった子供を授かる事が出来、妻と2人で大泣きした事は忘れません。

周りの人の話では、転勤族での懐妊の事例は多く、「子宝の島」とも言えるのでは！

島民は島外（本土）の人とのかかわりを敬遠する所があり、お付き合いをしてもらう事に時間がかかると聞いていました。

しかし、1度信用してもらうと何もかもが巧く廻り、仕事上でお客様との輪が広がって行く事でそれが自信に繋がり、自分を大きく成長させてもらったと実感する所でした。「心配り、心配り。」を忘れず実践した結果だと思います。

又、若い頃からバドミントンをやっており夫婦で大会に出場し優勝することもあり、私生活の面でも楽しみが増え、公私共々充実した日々を送れるようになって行きました。

知らぬ間に子供も3人になりましたが、育てる環境は最適な場所であったと確信しています。

平成7年、長かった様でアツという間の12年間の佐渡での生活に別れを告げました。

行きは「行きたくない」と泣いた妻に、今度は「帰りたい」と泣かれ、小学5年生の長男には「一人で佐渡に残る」と頑張られ、説得するのに困った思いをしたものでした。

行きは2人、帰りは5人の家族となった私たちはお世話になった皆様に感謝の気持ちでいっぱいでした。

佐渡とは縁が深いもので8年後、今度は営業所長として単身での再上陸でした。

酒は旨いし、釣りも覚え、島民同様のお付き合いが始まりました。

30年前とは違い観光地化が進み、道路はすっかり

整備され、又単身生活で有り難いコンビニも出来、6年半の快適な生活を送る事が出来ました。

最初は苦戦の連続で帰りたと思った程でしたが、島民の素朴で人間味のある人々との出会いが私を大きく成長させてくれました。現在も仕事上、月に1度は訪島しお世話になったお客様と面談が出来る立場となった事もあり、恩返しの意味で協力を惜しまずサポートしています。

皆様は佐渡と言えば真っ先に思い浮かべるのが「朱鷺、佐渡おけさ、佐渡金山」が代表的な所でしょうが、その他にも沢山の歴史や文化がある事をご存じですか？ 少し紹介します。

佐渡では1万年前から人が住んでいた事を示す土器、石器が発見されています。本土（本州）から人が入って来るようになったのは「流人の島」と言われるようになった8世紀頃からです。順徳上皇、日蓮上人、世阿弥等の島流しに合った人々から都の文化が入り、それと佐渡の文化との融合で独特の文化が形成されました。

芸能では「能、鬼太鼓、文弥人形、つぶろさし」等、勇壮に舞う姿は圧巻です。工芸は「竹細工」、「無名異焼」は佐渡独自の陶器として全国に知られています。

第一次産業が盛んな島では、山地から流れ込む清らかな水と農家の愛情で育った米が最高レベルの評価を得ています。

又、「おけさ柿、西瓜、梨、ブドウ」。山では「カンゾウの花」、海では冬の時期取れる「寒ブリ」これがまた絶品。

忘れてはいけないのが「日本酒」、現在蔵元が5ヶ所あり水と米が美味しい所なので、最高の日本酒が出来ます。飲みすぎ注意！

素朴で人間味のある人々と海、山、川、里の大自然に囲まれた島は味覚の宝庫であり、住み易く、自給自足が出来る島と言えるでしょう。

金山が栄えた頃、人口は最高20万人いた頃に比べ、現在は約6万人まで落ち込んだ事に関し、大変残念に思います。Uターン希望の若者を確保する事が佐渡市の大きな課題と言えるでしょう。

佐渡の観光大使の如くPRも含め、私の佐渡での思い出をまさに「ずいそう」の如く思いのまま取り留めない話となりましたが是非、「朱鷺の住む佐渡」へ行き、自分自身で体感してみてください。

きっと新しい発見があると思います。

佐渡での18年6ヶ月の生活は私の一生の宝物です。

——こん まさひろ キャタピラーウエストジャパン(株)

中日本支社 新潟支店長——